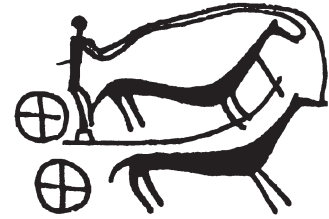


ニュースレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 88



総合入試導入に伴う初年次の学習状況の変化 (8 ページ)

PFF 講座: ティーチングとライティングの基礎 (10 ページ)

第2回次世代教育ワークショップを開催 (13 ページ)

スポーツトレーニングセンター利用者大幅増 (15 ページ)

「討論型世論調査」の社会実験を実施中 (17 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

全学教育部の使命と課題

高等教育推進機構副機構長・全学教育部長 文学研究科 教授 和田 博美

本年4月から高等教育推進機構副機構長・全学教育部長を務めております。文学研究科心理システム科学講座に所属しております。これまで心理学実験責任者やクラス担任を務めてきましたが、自分が担当する授業科目やクラスといった狭い視点からのみ全学教育と係わってきました。しかし今の役割は、全学教育全体を考えながら企画・調整することが求められます。これまでとは広がりも深さも違う職務に戸惑うことも多々ありますが、専門の事務職員に支えられながら全うしたいと考えております。

1. 全学教育部の業務

平成23年度より総合入試制度が実施されるのにもない、1年次学生の学籍管理等を担う機能が必

要となったことから、平成22年10月に旧高等教育機能開発総合センターが廃止され高等教育推進機構が設置されました。

高等教育推進機構は全学教育部、総合教育部、高等教育研究部、および教育支援部の4つの下部組織によって構成されています(図1)。全学教育部を統括し、全学教育の実施に関して必要な事項について企画、立案および調整を行うのが私の職務になります。

全学教育部はその機能を果たすため、全学教育専

門委員会と科目責任者会議の2つの会議を所掌します(図2)。一方の全学教育専門委員会は、全学教育科目に係わる教育課程の企画、開講計画、単位の実質化、その他全学教育の実施に関する事項を扱います。とくに専門的な事項を調査検討するために、成績評価・授業評価結果検討専門部会と成績評価審査専門部会の2つの専門部会を置いています。前者は教員による成績評価が妥当であるかどうか、平均GPAに極端な偏りがないかどうか等を調査検討します。後者は成績評価について学生から異議申し立てがあった場合に、学生本人と授業担当教員から事情を聞き、成績評価が適切であったかどうかを審査します。

もう一方の科目責任者会議は、授業科目ごとに置かれた科目責任者によって構成され、授業内容、成績評価基準、授業開講数、授業担当教員の選定、予算運用等について協議し部局間の調整を行います。

全学教育科目に係わる事項の中でも特に重要な事項については、全学教育部で協議・審議を経た後、高等教育推進機構学務委員会での審議を経て実施しております。

2. 今後の課題

全学教育では年間1,599クラスの授業を開講し、延べ74,169名の履修生を受け入れてきました(平成22年度実績)。また今年度からは総合入試制度が導入され、入学者総数2,606名、このうち総合

入試入学者が1,178名、学部別入試入学者が1,428名となっております。総合入試が始まったことにより、全学教育体制は新たな対応といっそうの充実が求められています。

その一つは、総合入試で入学した学生は本人の希望と1年次の移行点によって移行先の学部・学科が決定することから、成績評価に対して非常に敏感になっているという点です。成績評価に関して不公平感を持っている学生から投書(学生の声)が寄せられたり、成績評価に関する申立て制度を利用したりする学生もいます。このようなことから、とくに必修科目の授業内容の標準化と成績評価基準の妥当性が厳しく求められています。同じ授業科目であれば誰が担当しても同等の水準の授業を提供できるよう共通教科書を導入すること、平均GPAに極端な偏りがないようにすること等が必要です。

また希望する学部・学科に移行する方策として、能力があるにもかかわらずやさしいレベルの授業を履修する学生が見られます。とくに外国語演習では、中級・上級の力があるのに、初級や入門クラスを履修希望する学生が目立ちます。その結果、特定授業クラスに履修希望者が殺到し、抽選もれになった学生であふれるようなことも起きています。GPAや移行点を上げるために履修科目を決めるのだとすれば、教育本来の目的からはずれていると言わざるを得ません。

このように総合入試導入によって、従来には見ら

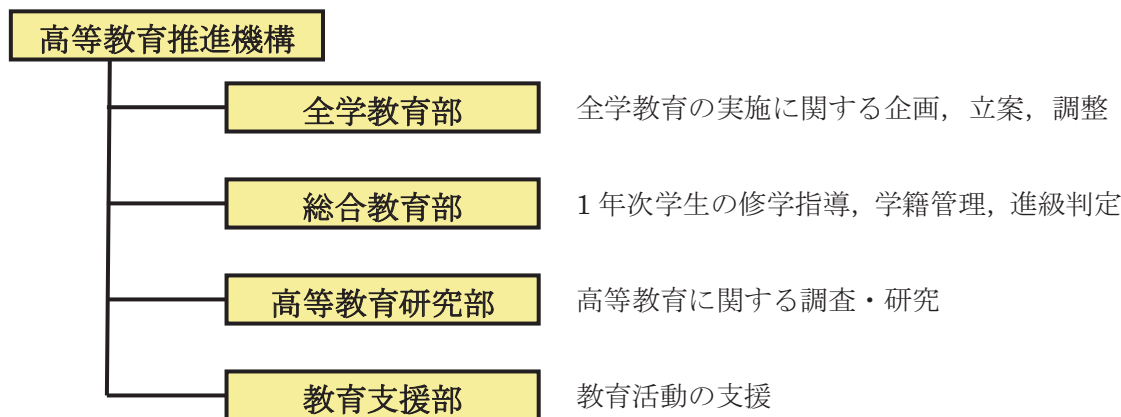


図1 高等教育推進機構の組織と機能

れなかった履修傾向が生まれました。今年は総合入試元年であるため、これまでのデータでは予測できないことも多々あります。今後のデータ蓄積と詳細な解析を通して学生の修学動向を把握するとともに、学生の声や成績評価に関する異議申し立てにも十分耳を傾け、より良い全学教育制度を構築できるよう務めていきたいと思ひます。

3. 半年を過ぎて

一時期は週に5～6回の会議があり、たいへん多忙なときがありました。右も左もわからない自分が、大勢の学生の教育に係わる問題を決めてよいのか、もっと年長の適任者がいるのではないかと自問自答しながらの毎日でした。全学教育部長の仕事と、授業の準備、学生の研究指導、自分自身の研究とのバランスをどうとるか。学ぶにはこと欠きません。しかし楽しいこともあります。様々な研究科の

先生方や全学の事務職員との出会いです。今までは同じ研究科の同僚であっても、なかなか話をする機会もありませんでした。まして他の研究科の教員や事務職員と接することはほとんどありません。それが全学の仕事にかかわるようになり、会議のたびに研究科を越えた方々と接する機会ができました。大学には様々な人がいると改めて感じることができました(会議で初めて会う人はどんな人だろうと考え、話し方やイスの座り方、視線、身振りなどに注意が向いてしまいます)。

全学教育部長に就任して半年がすぎ、高等教育推進機構の皆さん、とくに会議をともにすることの多い総合教育部長の山口淳二先生や全学教育担当事務職員の皆さんに助けられ、少しずつ職務にも慣れてきました。北大に入学して35年、これまでお世話になった母校のために少しでも役立ちたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

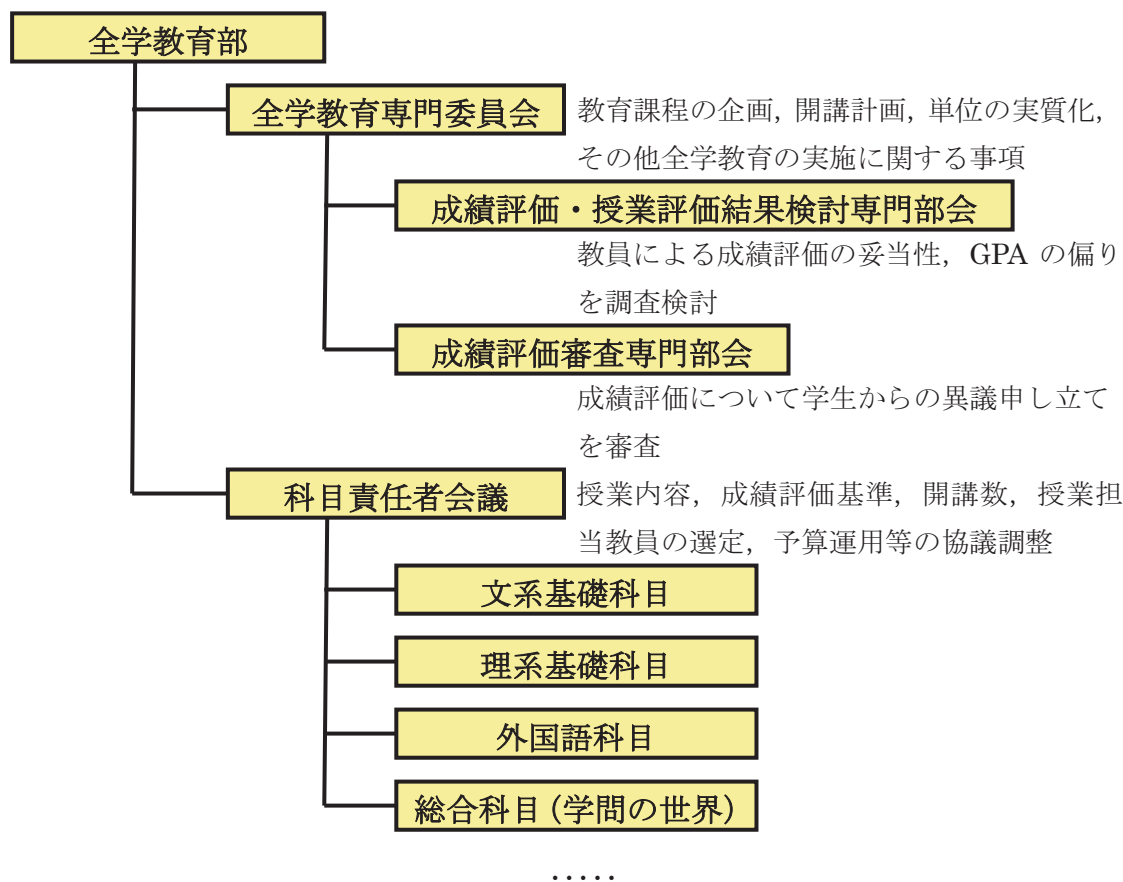


図2 全学教育部の構成

全学教育 GENERAL EDUCATION & **総合教育** FIRST YEAR EDUCATION

*****科目責任者・クラス担任からひとこと*****

総合科目「学問の世界」のスタート

「学問の世界」担当責任者 法学部 教授 辻 康夫

「学問の世界」は総合入試の実施に伴って新設された科目です。その目的は、総合入試で入学された学生さんが適切な進路選択をできるように、各学部への教育・研究への理解を深めてもらうことにあります。総合入試の入学者は、進路の決定に当たり、第1希望の学部のみならず、第2、第3希望をも考える必要がありますので、複数の学部の事情を理解していただく必要があります。この目的のため、この授業では、各学部の多様な学問分野の先生に講義をお願いし、それぞれの学部の全体像がつかめるようにする構成をとっています。

私の担当した「学問の世界：文科系科目」の授業では、文科系4学部（文学部、教育学部、法学部、経済学部）の16名の先生にご講義いただきました。受講者からは、志望の決定に大いに役立ったとい

う感想が多く寄せられ、それぞれの学部への理解が深まった様子がうかがわれました。

今後の課題としては、より多くの学生に受講していただくことがあげられます。当初、総合入試の入学者のほとんどに受講していただくことを想定していましたが、実際の受講者はかなり少なくなっています。進路決定にあたって、納得のゆく選択をしていただくためにも、より多くの学生さんに受講していただければと思っています。

総合入試制度と新入生の意識変化

平成23年度21組クラス担任 理学部 准教授 知北 和久

平成22年度と平成23年度に続けてクラス担任を担当しました。今回は、クラスアワーにおける新入生の反応や個別相談による学生の応答に変化が見られたことを報告します。

まず、今年度からの総合入試制度に対して早期から取り組んできたサポート組織が、これまで大きな役割を果たしていることを実感しています。

4月に開いたクラスアワー（オリエンテーション）では、クラスの中に総合入試入学者とAO・学部別入試入学者が混在しているため、私自身今後どう対処できるのか不安な面持ちで学生達に接しました。

しかし、6月の大学祭後の第2回クラスアワー

ではクラス全体がうち解けた様子で、この間のサポート体制（特に履修や進級・学部移行に関する相談）が大きく機能していることを感じました。

今年の夏休み中に1年生と2年生から計5件の相談を受けました。うち1件は今年度の学生で、進級に関する悩みでした。これについては面会当日、本人と話しながらアカデミック・サポートセンター

に連絡をとったところ、直ちに対応してもらい、その後本人から納得したメールをもらいました。

第3回クラスアワーは、学部移行ガイダンスのあった9月26日に実施しました。学生には、学部移行までのスケジュールを示して注意を呼びかけました。このクラスアワーでは、今後の学部移行に対する学生の希望・期待・緊張を強く感じました。昨年度の同時期におこなったクラスアワーとは異な

り、学生がある種のチャレンジ精神をもっており、より生き生きしている印象を受けました。

これからは進路の悩み、特に第一希望が叶えられなかった学生、移行できなかった学生への対処など、来年3月下旬の各学部の振分け結果が通知されるまで、気を引き締める期間に入っていきます。

今後も、相談には現支援体制を活用し、学生に納得してもらうまで根気よく対処していくつもりです。

今年の初年次学生の様子

平成23年度24組クラス副担任 医学部・保健学科 助教 下田 智子

9月末に開催した第3回クラスアワーで久しぶりに24組の学生と会いました。クラスアワー開始まで皆の様子を観察しましたところ、本を読んで過ごしている人、真っ黒に日焼けしている人、汗だくになって教室に駆けこんでくる人など、入学時の緊張した表情とは異なり、リラックスしてすっかり大学生らしい雰囲気をかもしだしていました。

今回、GPAを利用した修学指導を目的とした面談を担当とともに行いました。クラスの半数の学生と面談する機会を得たのですが、その中で「将来の安定を考えると〇〇学部に行きたいと思うけど、自分の興味は〇〇学部にあるんです」「僕、総合理系なのに理系科目が苦手で、後期は頑張ります」と自分の進路や修学状況について考えている学生や、「夜更かししちゃうから、朝起きれなくなってきました。でも、次の日が授業の時は、早く寝るようにしてま

す」と自分の生活状況を語る学生もいました。

また、自分の学部が決定していないことや、専門科目の履修がないために、将来が漠然としていてモチベーションが上がらないという話も聞きました。けれども、皆元気そうな姿で安心しました。そして、全学教育で広い知識と教養を身につけ、さまざまな選択肢に真剣に向かい合っている様子でした。

新たな制度である総合入試にチャレンジした学生には、大いに奮起して、是非自らの希望と合致した進路を選択し、大学生活と勉強に励んでほしいと期待します。

学務委員会等報告

平成 23 年 8 月 5 日 (金) に平成 23 年度第 1 回、同 9 月 14 日 (水) に同第 2 回学務委員会が開催され、以下の議題について話し合いました。

第 1 回学務委員会

議題

1. 平成 24 年度全学教育科目の開講計画
2. 総合入試入学者の学部移行に係る検討事項

報告事項

1. 外国語演習の実施
2. 平成 23 年度全学教育専門委員会の検討事項
3. 平成 23 年度第 1 学期履修者数
4. 平成 22 年度第 2 学期の成績評価結果等
5. 平成 22 年度第 2 学期の GPA
6. 平成 22 年度初習外国語 II の CALL 授業
7. 出欠管理システムの運用方法
8. 平成 23 年度新入生アンケート「希望移行学部」
9. 1 年次学生の異動
10. 1 年次学生の既修得単位認定結果

平成 24 年度開講計画

平成 24 年度の全学教育科目の開講計画が了承さ

れ、この案に基づき開講計画を立案中です。

総合入試入学者の学部移行

9 月 28 日から第 1 回志望調査を実施する上での問題点とその対応策について話し合いました。

年度末の学部・学科等への移行は、学生本人の希望と移行点に基づいて決定します。今回は、1 学期の成績のみを用いて希望調査と移行のシミュレーションを行い、1 学期の成績に基づいた「第 1 学期移行点」を用いることになりました。

また、学部・学科等への移行における同点者の取り扱い、来年度以降の留年者に移行年度の規則が適用されること等が了承されました。

外国語演習の追加開講

今年度第 1 学期の英語演習の履修申請者が昨年度より約 600 名増加しました。その結果、移行点算出基準単位を満たすために外国語演習の単位修得を要する総合入試文系入学者の多くが外国語演習を 1 科目も履修できない状況が生じ、その対策として集中講義の新たな開講等の対応を取りました。また、来年度に向けた対応も話し合いました。

表 1 平成 23/22 年度 (第 1 学期) 全学教育科目履修者数対比表 (履修取消後) (2011.7.1)

授業科目	23 年度 1 学期			22 年度 1 学期			23/22 年度比較	
	クラス数	履修者数	1 クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1 クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
一般教育演習 (フレッシュマンセミナー)	97	2,199	22.67	84	1,625	19.35	574	135.3%
総合科目	39	4,360	111.79	34	3,471	102.09	889	125.6%
主題別科目	91	8,901	97.81	98	8,319	84.89	582	107.0%
共通科目	79	5,311	67.23	84	5,508	65.57	▲ 197	96.4%
外国語科目	221	8,265	37.40	222	8,052	36.27	213	102.6%
外国語演習	151	2,892	19.15	161	2,621	16.28	271	110.3%
文系基礎科目	11	1,413	128.45	10	1,403	140.30	10	100.7%
数学	70	3,966	56.66	65	3,809	58.60	157	104.1%
理科	90	6,089	67.66	90	5,691	63.23	398	107.0%
実験	18	1,018	56.56	22	927	42.14	91	109.8%
日本語・日本事情	4	25	6.25	4	36	9.00	▲ 11	69.4%
全学教育科目 1 学期合計	871	44,439	51.02	874	41,462	47.44	2,977	107.2%

「インターンシップ」、「英語演習」(集中) 3 科目の 23 年度の履修者数が未定のためこれらは除いて算出

平成 23 年度第 1 学期履修者数

平成 23 年度 1 学期の履修者数が報告されました。今学期は、総合教育部の発足に伴い、履修者数の大幅な変動がありました。昨年度に比べ、全学教育科目 1 学期の履修者数は約 3,000 名増加しました。特に総合科目は 889 名、主題別科目は 582 名、外国語は 484 名、基礎科目は 656 名増えました。一方、体育学 A が 337 名、フランス語が 175 名減ったのが目につきます (表 1)。

平成 22 年度第 2 学期成績評価結果

平成 22 年度 2 学期の成績評価について「偏りがある」とされた科目への照会結果等の報告がありました。また照会に係る許容範囲を従来通り GPA 1.90 ～ 2.90 とすることが報告されました。

平成 22 年度初習外国語 II の CALL 授業

平成 20 年度よりドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語で CALL 授業を導入しています。履修者数はドイツ語 847 名、フランス語 447 名、ロシア語 82 名、中国語 760 名です。最新のメディア機器を利用して、対面授業による教育とほぼ同等の効果を維持することが可能となりました。

出欠管理システムの導入

平成 23 年度 2 学期より IC カードリーダーによる出欠管理システムが導入されます。学生の出欠状況を自動で確認し、教員による出欠確認の時間短縮とともに、学生の出欠状況データを活用することにより、長期欠席学生を把握し、学生に対する修学指導、学生支援に資することを目的としています。この運用方法についての説明がありました。

第 2 回学務委員会

議題

1. 平成 24 年度全学教育科目の学年暦の見直し
2. 「北海道大学鈴木章科学奨励賞－自然科学実験－」被表彰者の選考

報告事項

1. 飲酒事故防止

学年暦の見直し

国際化に対応した柔軟な教育課程編成の推進等に資する方策として、平成 24 年度からの学年暦の見直しが検討され、全学教育科目の授業を一部 6 講時に実施することにより、夏季休業の開始を早める案が了承されました。

来年度は、5 月 21 日～6 月 28 日の月、火、木曜日の 6 講時に一部の授業を行うことにより、1 学期の授業終了は 8 月 3 日になる予定です。なお、今回の見直し案はあくまで試案であり流動的なものとして、引き続き検討していくことになります。

第 1 回鈴木章科学奨励賞

今年度 1 学期より実施された北海道大学鈴木章科学奨励賞の被表彰者 2 名を決定しました。

また、飲酒事故防止、カルト団体による勧誘についての報告がありました。

以下、各専門委員会の報告は、学務委員会と同じ内容は割愛します。

なお、学生の休学・退学等については、毎月持ち回り総合教育教務専門委員会により審議しました。

総合教育移行専門委員会

平成 23 年 7 月 7 日 (木) と 9 月 12 日 (月) に第 2 回および第 3 回総合教育移行専門委員会が開催され、以下について話し合いました。

第 2 回委員会では、9 月 26、27 日に実施される学部 (・学科等) 移行ガイダンス及び学部 (・学科等) 紹介について、またその際配布される学部 (・学科等) 移行ガイドブックについて話し合いました。移行に係る検討事項として、第 1 回志望調査の移行点の取り扱い、留年者の取り扱い等について話し合いました。

第 3 回委員会では、移行点と同じ場合の席次の決定方法について話し合い、さらに移行システムの検証について、具体的にデモンストレーションしながら検討しました。移行システムは 9 月末に実施される第 1 回志望調査より用いられ、順次修正を加えながら 3 月の移行終了まで実施します。

9 月 26 日、27 日の学部・学科等移行ガイダンス及び学部・学科紹介等について説明がありました。

(山口 淳二 理学研究院教授・副機構長)

総合入試導入に伴う初年次の学習状況の変化

～導入科目の履修者数増加と GPA の上昇～

総合入試による入学者をはじめて迎えて、学習状況にさまざまな変化がみられます。

9月にクラスアワーを行ったクラス担任は「(昨年度に比べ) 学生がある種のチャレンジ精神をもっており、より生き生きしている」「入学時の緊張した表情とは異なり、リラックスしてすっかり大学生らしい雰囲気(…)。全学教育で広い知識と教養を身につけ、さまざまな選択肢に真剣に向かい合っている様子」と報告しています(本号5ページ)。

履修者数は、一般教育演習(+35%)、総合科目(+26%)など初年次向けの「導入科目」で大きく伸びています(本号6ページ)。

8月末に1学期の成績評価結果が個別に公開さ

れ、成績確認、成績評価に関する申立て、自由設計科目登録変更などが行われました。この時点の速報値ではGPAが昨年度に比べて2.39⇒2.44と上昇しています。特に総合・理系の平均値2.53が全学平均を大きく上回っているのが目を引きます。総合入試入学者が意欲的に学習した成果と思われます。

学習状況の評価には、今後もさまざまなデータに注目する必要がありますが、履修者数に見合った開講科目数の確保、自由設計科目の登録可能単位数や成績優秀者向け特例措置の基準値などについて、きめ細かな見直しが必要になると考えられます。

(IR研究会：細川 敏幸, 安藤 厚)

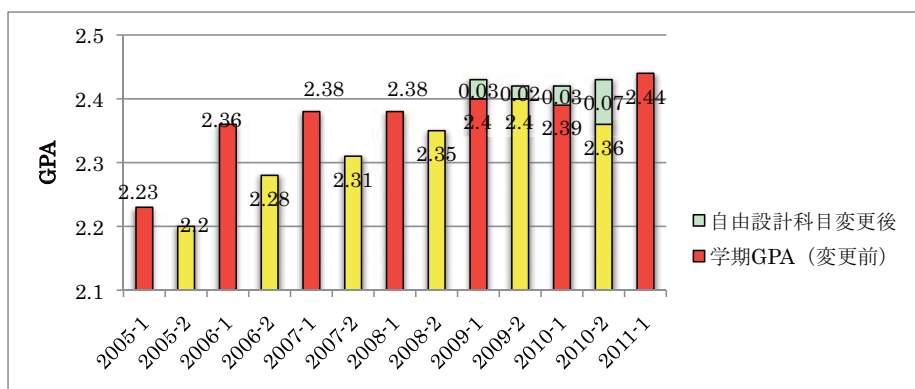


図1 1年次1, 2学期 GPA の変化 (全学平均, 2005～2011)

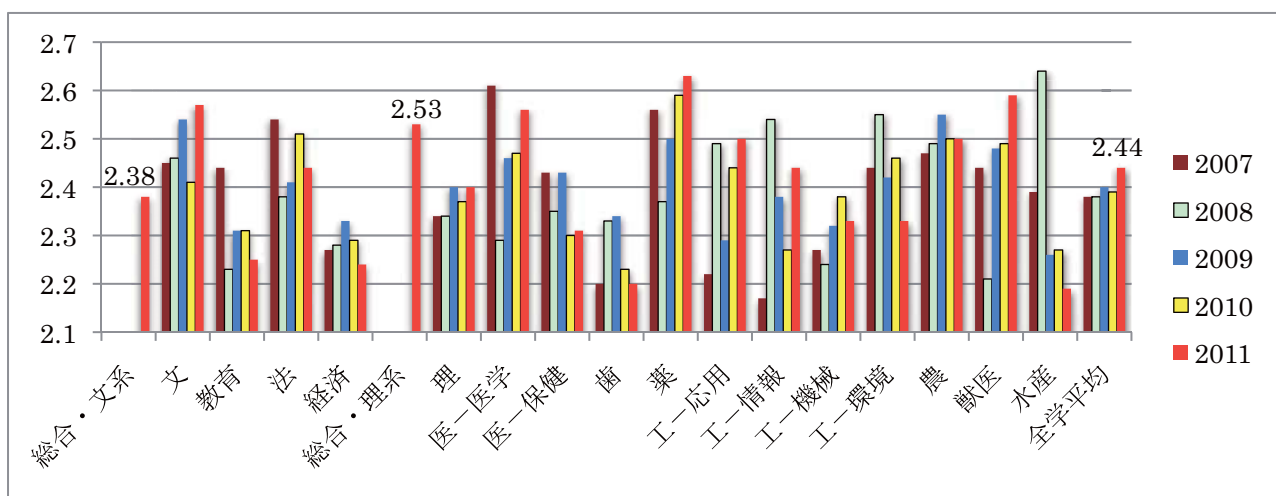


図2 1年次1学期 GPA の変化 (学部学科別, 2007～2011)

Greetings from a new visiting professor

Shi-Huei Ho, Ed.D. Visiting Professor from Soochow University, Taipei, Taiwan

Hajimemashite Yoroshiku-onegaishimasu!

It is my honor to be invited as a visiting professor in Hokkaido University, because this University has not only the best campus scenery but also leading academic fields, which has been recognized by many educational institutions. Like an internationally-known motto said by Dr. William S. Clark, "Boys, be ambitious!", I find that the faculty and staff in the Institute for the Advancement of Higher Education are very active and creative, and most importantly, they are devoted to the service of curriculum design, faculty development and student learning, as well as the research and innovation of higher education. At this point, "ambitious" should be the best word to describe how I feel about Hokkaido University, in which I believe I will learn a lot during my visiting.

I am the founder and the Director of Center for Teaching and Learning in Soochow University in Taiwan. With the spirit of innovation and breakthrough, this Center continues Soochow's tradition of devotion to higher education by integrating existing resources and infusing research manpower as well as funds, so it operates as a multifunctional unit to enhance faculty's teaching quality and effectiveness, establish student learning support and assistant system, provide service and training for faculty and students to be familiar with instructional technology, and also develop appropriate teaching and learning outcome evaluation mechanism. This Center was the first established in 2005 with the goal to provide teaching/learning resources

for teachers and students amongst Taiwan's universities, endorsed by university-level administrative committee and approved January 2006 by the Ministry of Education in Taiwan.

Then with distinguished performance, Ministry of Education granted this Center as Northern Taiwan Teaching and Learning Resource Center in 2008.

Based on its practical experiences and outstanding results from Teaching Excellence Project, this goal-oriented Center initializes the ideas of "resource integration," "mutual sharing," "cooperation model" and "paradigm transfer" by providing consultation services and forming alliances with more than twenty universities in and around Taipei City and Keelung County. In particular, top research universities such as National Taiwan University, National ChengChi University and National YangMing University, as well as other teaching excellent universities have also taken part in the program, working together to support and expanding inter-school resource and cooperation.

Since I am also appointed as the consultant and the evaluator of several policy-based projects in Taiwan's Ministry of Education, I fully support the function and implementation of the regional Teaching and Learning Resource Center which acts as a learning organization, because the impacts of low birth rate, uneven allocation of

educational resources, dissatisfied performance of graduates and institutional quality assurance are vital issues faced by our higher education system. In terms of establishing a public e-platform and providing inter-school activities and feedback, the regional Center creates a resource sharing and integration mechanism, plus assists demanding universities/colleges in improving their teaching and learning quality. With research study as the basis, the Center also collects information on model cases and successful stories from partner institutions, which forms a medium for paradigm shift in policy-making, curriculum reform, pedagogical innovation and outcome-based evaluation, etc.

Through devoting myself to manage these two Teaching and Learning Centers for many years, my research specialty focuses on faculty development and student learning outcome in higher education, especially in the topic of quality assurance, including curriculum design, content and organization; teaching, learning and assessment; student progression and achievement;

quality review and enhancement. My concern in higher education is that each institution should care about its own academic standards and quality, which means supporting effective teaching, aligning curriculum, instruction and assessment, and providing outcome-based evaluation and learning opportunities.

Although this is my first time in Hokkaido University with a lot of curiosity and excitement, I am going to cherish the opportunity I have and work with such serious and responsible hard-working faculty in the Research Division, as well as investigate perspectives of teachers and students here towards institutional quality assurance and learning outcome evaluation.

In short, I am grateful that Institute for the Advancement of Higher Education, especially Research Division, makes me have this chance to be a visiting professor here. The people in the campus are very amiable and professional. As visiting many universities around the world, I admire Hokkaido!

第3回「大学院生のための大学教員養成 (PFF) 講座：ティーチングとライティングの基礎」に高い評価と期待

昨年の3月と7月に続いて3回目の「大学院生のための大学教員養成 (Preparing Future Faculty) 講座：ティーチングとライティングの基礎」が、カリフォルニア大学バークレー校・大学院機構・大学院生講師 (GSI) 教育支援センター長リンダ・フォンヘーネ博士と同アカデミックサービス部長サブリーナ・ソラッコ氏を迎えて、7月27日～8月2日に開催されました。学生37人が無事修了し、うち30人は大学院共通授業科目として履修しました。

筑波大学の学生3人と見学者1人、東北大学の見学者1人が参加したほか、サステイナビリティ学教育研究センターの協力で、函館キャンパスとイ

ンドネシア・パラカラヤ大学へテレビ中継し、函館ではチューターの指導の下、学生4人が札幌会場と同等の資格で参加しました (表1)。

表1 受講者・見学者数の推移 (2009~2011)

	2011	2010	2009
受講申込*	56	64	72
受講許可*	38	32	27
修了*	37	30	26
大学院共通授業履修*	30	22	
見学 (札幌) 出席5回以上	16	17	11
見学 (函館)	2	17	

* 2011年度は函館の受講学生4人を含む

ワークショップの内容は基本的に前回と同じです。

フォンヘーネ (ティーチング)

2. ティーチングの基礎 (ハンドアウト 3 ページ)
4. 授業のシラバスと学習目標の設計 (28 ページ, シラバス例 21 ページ)
7. 評価基準の作成と利用方法 (40 ページ)
8. 大人教授業のやり方 (3 ページ)
10. 職務規定と教育倫理
ソラッコ (ライティング)
3. アカデミック・ライティングの基礎 (88 ページ)
5. 学会発表申し込み (41 ページ)
6. 国際学会誌への論文投稿 (83 ページ)
9. 論文要旨執筆方法 (26 ページ)
11. 論文の推敲・校閲 (9 ページ)

受講生の構成は、日本人が 40% 強と、第 1 回とほぼ同じ比率です。専攻分野別では、抽選で調整し、文系、工学系の人数は変わらず、理系の比率が大きく増えました。修士課程、博士課程、その他ポストドク等のバランスは、検討が必要です (表 2)。

表 2 受講生の内訳 (2009~2011)
日本人 / 留学生 ; 専攻分野 ; 所属 (修士 / 博士 / 他)

	2011	2010	2009
日本人	16 (43%)	11 (37%)	11 (41%)
留学生	21 (57%)	19 (63%)	16 (59%)
文系	9 (24%)	8 (27%)	9 (35%)
工学系	8 (22%)	9 (30%)	7 (27%)
理系	20 (54%)	13 (43%)	10 (38%)
博士	25 (68%)	17 (57%)	19 (73%)
修士	12 (32%)	13 (43%)	5 (19%)
その他			2 (8%)

授業は作業量が多いへん多く、教室外の総学習時間は平均 28.4 (最大 120, 最小 3) 時間でした。みな熱心に取り組み、出席率は平均 96.6%, 成績評価は「秀」83.8%, クラス GPA は 3.81 と、いずれも前回とほぼ同じ高いレベルでした。

事後アンケートで、受講生が共通して挙げる良い点は、シラバスや、投稿論文要旨・カバーレター等の書き方を学んだことのほか、講義とペア・グループ・クラス全体の討論を組み合わせた双方向的授業と、1 週間入念に準備した最後の 2 回のプレゼンテーションです。二人の講師の授業運営の手腕も

高く評価されました。感想をいくつか紹介します。

「中国人学生として、アメリカの先生の授業を受けるのははじめてでした。その授業方法は、中国や日本の先生とはまったく違いました。もっとも重要な印象は、グループの他の学生とたくさん討論ができたことです。」(文系)

「教師には学生との関係を円滑にする人間的能力がとても大事なことを学びました。リンダ先生とサブリーナ先生が学生の意見や考えに対応するやり方に感銘を受けました。私も将来同じようにできたらと思います。ワークショップの前は、大学教員になる自信どころか、考えもしませんでした。今はもっと準備ができたと感じ、大学教員になりたいと思うようになりました。」(文系・筑波大)

「ティーチングとライティングについてたくさん学びました。特に自分の大学における大人教授業の問題に気づかされ (...), 自分の大学に能動的学習を広めたいです。」(理系・カンボジア)

「ワークショップの国際的な雰囲気が楽しかった。書くことは教えること、という言葉がもっとも印象的でした。サブリーナ先生が最後に、このワークショップの質はバークリーに劣らないと言ったので、自信がわきました。」(工・日本)

「もっとも価値があったことは、舞台に上がる前に、リンダ先生とサブリーナ先生のように、個々の知識だけでなく、学生に対する忍耐、敬意、愛、信頼、信用を持ち、楽譜に沿ってアドリブを交える最上の質のパフォーマンスを身につける必要があることを学んだことです。本当に成熟した人がどのように行動するかを学びました。」(情報・日本)

「大学教員に期待されることについて見通しが得られました。ワークショップを終えて、産業の研究職よりも、教育職について真剣に考えるようになりました。」(医、ジャマイカ)

プログラムの総合評価は、2009 年度 4.72, 2010, 2011 年度は 4.43 と、高評価が定着しました (最低 1.0 ~ 最高 5.0)。

要素別の評価は、ティーチング 4.70 に対し、ライティング 4.43 (図 1), 学習成果の自己評価も、教育の知識と技能 4.41 に対し、その他の知識技能はいずれも 4.0 前後と (図 2), とともにティーチング

に関する評価が高くなっています。これは、学生はティーチングについて学ぶのが初めてのためと推測できます。

そのほか、シンポジウム「国際的キャリア養成のロードマップ2011」を行いました。

文・瀬名波栄潤准教授「北大の大学院生のためのキャリア養成プログラム」

メディア・コミュニケーション研究院・鍋島孝子准教授「現地調査とは何か：現地を見つめる社会科学の視点の養成」

国際本部・石井治恵氏「私のキャリアパス：道は拓ける（ケセラセラ）」

本ワークショップには大学院生の熱い期待が寄せられています。講師のお二人も継続に意欲的なので、来年度も開催を検討し、この先駆的な次世代型ワークショップを持続可能なカリキュラムの一つとして本学に根付かせたいと希望しています。

(文学研究科・准教授 瀬名波 栄潤、
名誉教授 安藤 厚)

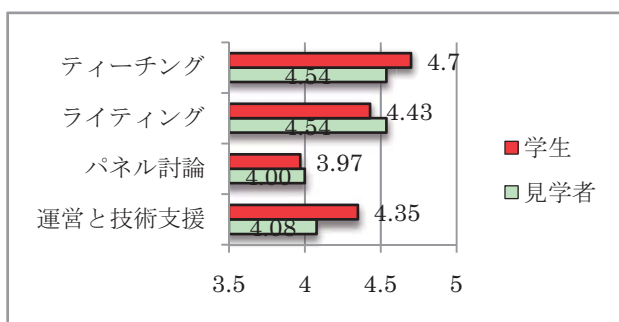


図1 要素別の評価(2011)

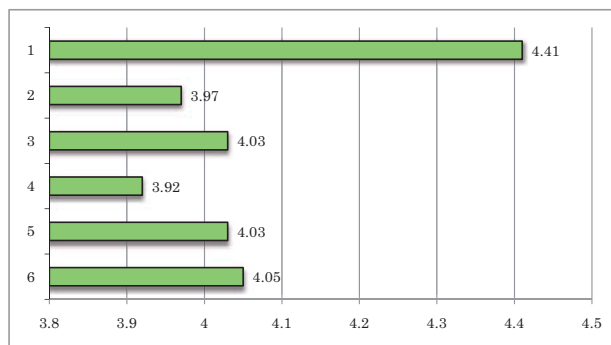


図2 学習成果の自己評価(2011)

1. 教育の知識と技能
2. TAの知識と技能
3. 学会発表申込・学術雑誌論文の作文
4. 英語による発表・討論・ピアレビュー
5. アカデミックな専門職の仕事の説明
6. 国際的アカデミックな専門職の知識と技能



写真1 PFF 講座修了式

第2回次世代教育ワークショップを開催（参加者募集）

高等教育開発研究部門では、「次世代FD研究」の一環として、昨年、中堅教員を対象とした研修会を試行しました。本年度は、その成果を受け本格的な研修としての次世代教育ワークショップを、平成23年12月9日（金）～10日（土）に高等教育推進機構において実施します。

大学教員は勤務する大学の社会的存在価値を高めるために、教育・研究・社会貢献などに寄与する責務があります。中堅以上の教員は、さらに管理運営への参加も求められています。このワークショップでは、中堅教員を対象として、組織的な教育改善計画を作成することにより、具体的な教育改善手法の基礎を身につけることを目指します。

この研修では、大学の使命を再確認し、本学の最近の動向と現状をふまえた教員としてのあり方と各教員の大学での責務を認識し、大学の発展、とくに教育力向上への具体的な行動計画を設計し実践できることを目的とします。

近い将来、機関の組織改革や教育改革に関わる方、教育あるいは研究関連の外部資金に応募される方に最適です。

今回のテーマは「大学の国際化」です。ワークショップの概要の説明の後、アイスブレイキングを挟み、このテーマに関するさまざまなニーズを洗い出します。次に、その解決を図るために、プロジェクトの目的、目標項目、達成基準、実施方法を設定し、さらに計画を明確化するために分担マトリックス表を作成します。最後に個人目標役割期待シートを作成して、全体の設計ができ上がります。以上の手法を、グループ学習により、実際にワークシートに記入しながら習得します。これにより目的の定まった組織改革や教育改革を、いかにして実行するかを具体的に学ぶことができます。

北大に採用・赴任されて5年以上の教員（准教授以上の職）で、2日間のワークショップに参加できる方を募集します。参加費は無料、募集人数は30名です。本ワークショップは北海道FD・SD推進協議会の活動の一環で、他大学の教員も参加できます。また、宿泊を伴わないので、気軽に参加できます。

現在、参加者を募集しています。以下のメールアドレスでも申込を受け付けます。

thoso@high.hokudai.ac.jp (細川 敏幸)

表1 第2回次世代FDワークショップ プログラム（予定）

2011年12月9日（金）（会場：高等教育推進機構）	
9:00 受付 北海道大学・百年記念館 1階大会議室	15:40 ミニ講義「実施計画」（WS3 関連）（15分） + < WS3 の課題の説明 >（5分）
9:15 挨拶 高等教育推進機構長 山口佳三 副学長・理事（10分）	16:00 グループ討論室への移動と役割分担（5分）
9:25 研修のオリエンテーション	16:05 WS3「目標設定・チームによる課題解決計画 ：実施方法と役割分担」（55分）
ミニ講義「このワークショップの趣旨」（15分）	17:00 WS3 の発表（40分）
ミニ講義「大学教員の業務」（15分）	17:40 1日目 終了
ミニ講義「PDCA サイクルと目標設定」（10分）	
10:05 アイスブレイキング（15分）	2011年12月10日（土）
10:20 <休憩>（20分）	9:00 集合
10:40 ミニ講義「ニーズの把握」（WS1 関連）（15分） + < WS1 の課題の説明 >（5分）	9:10 ミニ講義「役割分担と作業の具体化」（WS4 関連）（15分） + < WS4 の課題の説明 >（5分）
11:00 グループ討論室への移動と役割分担（5分）	9:30 グループ討論室への移動と役割分担（5分）
11:05 WS1「課題のニーズ、背景の把握」（55分）	9:35 WS4「個人業務、大学・学部・学科業務」個人作業（60分）
12:00 WS1 の発表（30分）	10:35 <休憩>（20分）
12:30 <昼食>（60分）	10:55 WS4「個人業務、大学・学部・学科業務」統合作業（20分）
13:30 ミニ講義「目標設定」（WS2 関連）（15分） + < WS2 の課題の説明 >（5分）	11:15 WS4 の発表（45分）
13:50 グループ討論室への移動と役割分担（5分）	12:00 <昼食>（60分）
13:55 WS2「目標設定・チームによる課題解決計画 ：目的、目標項目、達成基準」（55分）	13:00 ミニ講義「まとめと評価の話」（20分）
14:50 WS2 の発表（30分）	13:20 総合討論、まとめ、振り返り（60分）
15:20 <休憩>（20分）	14:20 修了証授与式（10分）
	14:30 終了

パソコンに採点させてみませんか？

～クリッカー& ELMS 利用のすすめ～

講義形式で授業を行うときは、学生の注意を集め続けるのはなかなか難しいものです。しかし、重要なポイントでは学生を前に向かせる必要があります。とはいっても、授業に抑揚をつけて学生を引きつけるのは高等テクニックといえるでしょう。

そのようなときには、クリッカーを使うと学生を引きつけることができます。クリッカーは、教員がパワーポイントで出題したクイズに学生がリモコンで答えるシステムです(写真1)。クイズが出題されると学生は注目しますので、重要なポイントを絡めたクイズを出題すると効果的です。教員は、いつでもクリッカーを借りることができます。

詳しくは当部門のHPをご覧ください。

<http://socyo.high.hokudai.ac.jp/>

授業以外でも、オリエンテーション、公開講座、講演会、学科で購入する前の試用などで多くの方が貸出しクリッカーを利用しています。特に、クリッカーを使うことで、通常点の収集ができるため、講義形式でも毎回の授業を点数化できて便利です。エクセルに採点結果が書き出されるため、そのまま成績に反映できます。

また、今年度から、新機能の「リアルタイム登録」を紹介しています。

http://socyo.high.hokudai.ac.jp/manual_v21.pdf

授業の初めにクリッカーを使って学生とリモコンを対応づける方法です。学生にどのリモコンを渡しても、解答結果を学生別に記録することができます。すでにクリッカーを利用している方も、一度試してみてもはいかがでしょうか。



写真1 クリッカーの受信機とリモコン

また、授業外学習についてもITの力を借りて効率をあげている先生方がいます。大学の授業は1単位45時間の学修が必要とされていますので、教員は授業時間内だけではなく、授業外学習のコンテンツも提供しなければなりません。しかし、宿題を出せば出すほど採点などの手間がかかってしまいます。

この対応策として、自動採点機能付きの小テストをラーニング・マネジメント・システム(LMS)で行う方法があります。北大には情報基盤センターが運営しているELMSというLMSがあります(写真2)。

<http://www.ec.hokudai.ac.jp/>

学生はELMSにログインして履修登録を行いますし、1年生全員が履修する「情報学I」ではELMS上で資料閲覧、レポート提出、小テストなどを行っており、学生はELMSに慣れています。通常の授業でもELMSを利用できますので、特に選択肢式の小テストを宿題としてみることをお勧めします。

ELMSは非常勤講師など北大の職員番号を所有していない方も利用できます。希望する方は「ELMSの利用について」の「一般個人利用申請」をご覧ください。

<http://www.ec.hokudai.ac.jp/docs/index.html>

また、北大に所属していない受講者がゲストとしてログインできるようにできます。「特別参加者ID発行」はデフォルトでは3人までですが、公開講座などで多くの学外参加者にIDを配布したい場合は、ログイン後の「問い合わせ」からご依頼ください。

(山田 邦雅)



写真2 ELMSの画面

総合教育の充実を目指して

～第18回 北大教育ワークショップ～

「北海道大学教育ワークショップ」(全学FD)は平成19年度から年2回開催されるようになり、今年度1回目の第18回は、2011年6月3日(金)、4日(土)の両日、いつもの奈井江町農業改善センター(奈井江温泉ホテル北の湯)で、表1の内容で行われ、学内34名の若手教員が参加しました。

初日は事務局大会議室で午前8時15分から受付、8時30分から総長代理として山口佳三高等教育推進機構長(副学長理事)が挨拶(写真1)、8時55分にバスで出発しました。バスの中では、参加者の自己紹介で研修が始まりました。

会場に到着後、記念写真を取り(写真2)、午前10時20分から山口淳二総合教育部長による最初のミニ講義「北大の全学教育と総合入試」で研修が始まりました(写真3)。この教育ワークショップのメインの内容はシラバスの作成法を学ぶこと

が、毎回そのときにあった内容を選んで講演などを行い、テーマに掲げています。今回のテーマは、今年度から始まった総合入試に合わせて「総合教育の充実を目指して」でした。

2つ目のミニ講義は情報基盤センターの岡部成玄先生に「授業における著作権」という題でお話いただきました(写真4)。

次に研修のオリエンテーションを行い、参加者を5グループに分け、魅力ある授業の工夫を盛り込んで、新しい授業を設計するという課題で、グループ作業を行いました。各グループにはあらかじめ次の授業タイプが指定されています。

AとB：一般教育演習(学生数20、90分授業を週1回で15週)、

C：フィールド型一般教育演習(学生数20、集中授業1週間/月曜日に出発して金曜日に帰る)、

表1 第18回第18回北海道大学教育ワークショッププログラム

2011年6月3日(金)		16:10	ミニ講義「教育方略」
8:15	受付 北海道大学・事務局 大会議室に集合	16:40	グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動
8:30	挨拶 総長代理 高等教育推進機構長 山口 佳三 副学長	16:50	グループ作業 II 「授業の設計2: (目標の手直しと) 方略」
8:55	バス出発 研修開始: オリエンテーション(挨拶, 自己紹介)	17:50	発表・全体討論
10:10	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着, 玄関前で記念写真	18:30	夕食
10:20	ミニ講義「北大の全学教育と総合入試」	19:20	ミニ講義「クリッカー」
10:50	休憩	20:00	懇親会
11:05	ミニ講義「授業における著作権」	2011年6月4日(土)	
11:35	ミニ講義「FDの目的と教育倫理」	7:30	朝食
12:10	昼食 50分	8:30	ミニ講義「教育評価」
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」 ・アイスブレイキング (30分)	9:00	グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動
13:30	ミニ講義「カリキュラムの構成要素とシラバス」 「学習目標」(15分+15分)	9:10	グループ作業 III 「授業の設計3: (方略の手直しと) 評価」
14:00	グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動	10:10	発表・全体討論
14:10	グループ作業 I 「授業の設計1: 科目名・目標の設定」	11:00	休憩
15:10	発表・全体討論	11:15	修了証授与・参加者の個人的感想や意見
15:50	休憩	12:00	昼食
		13:00	バス出発
		14:30	JR 札幌駅北口到着

D:総合科目(大講堂, 90分授業を週1回で15週, 総合入試入学者のための科目),

E:大学院共通科目(90分授業を週1回で15週, 6名程度の講師が交代で行う)。

グループ討論は「北大方式」により、機材としてパソコン、プロジェクタ、スクリーン(模造紙を壁に貼る)を使います。討論内容をパソコンに入力し、プロジェクタで2mくらい先のスクリーンに投影し、グループのメンバー全員がそれを見ながら討論します(写真5)。パソコンのモニター画面を全員で見するには少し無理がありますが、この方法では席を立たずに見ることができるので、黒板かホワイトボードの前で討論しているような感じです。討論終了後にはファイルとして記録が残るので、ホワイトボードより効率的です。全体討論の発表はPower

Pointで行います(写真6)。

授業の設計は、3つのセッションに分けられ、(I)科目名と目標、(II)方略(15回分の授業内容)、(III)「評価基準」の順に行われました。各セッションは、(1)30分程度のミニ講義、(2)小グループに分かれて60分の討論、(3)全員が集まって討論の成果の発表会という3つの部分からなるセッションを繰り返すという構成です。

2日目には、シラバスの最後の項目「評価」を完成させてワークショップを終了し、例年のように有意義な会になりました。各グループ作成のシラバスの科目名と目標は表2の通りです。

最後に、研修会修了証の授与式が行われ(写真7)、昼食後バスで札幌に帰り解散しました。

(西森 敏之)



写真1 山口副学長の挨拶



写真3 山口淳二総合教育部長の講演

写真2 記念写真

表2 各グループが作成したシラバスから ... 科目名と目標

<グループ A>

【科目名】一般教育演習「科学技術への招待（そうなんだ科学技術）」

【一般目標】

- ①ゼミ発表の準備，報告，議論についての基礎的な能力を身につける
- ②北海道にゆかりのある自然・人文・社会科学に興味もつことで，自学自習の方法を理解する
- ③北海道大学発の研究を知る

【行動目標】

- ①受講生は本講義を通じて，課題解決に必要な情報を収集できるようにする。
→ 正確な情報の収集
- ②受講生は本講義を通じて，課題解決に必要な情報を客観的に判断ができるようにする。
→ 正確な情報の判断
- ③受講生は本講義を通じて，課題解決に必要な情報の発信ができるようにする。
→ 正確な情報の伝達
- ④発表を聞く受講生は，発表内容を理解し，積極的に質問ができるようになる。
- ⑤ディスカッションの技術を身につけ，他人の発表を真摯に聞くようにする。

<グループ B>

【科目名】一般教育演習「北海道学入門」

【概要】北海道の自然・人文科学をとおしてフロンティア精神を育む

【一般目標】

- ①社会の要請に応えるために，大学生として必要な科学技術の情報を集めて判断し，発信する能力を身につける。
- ②新聞・雑誌で取り上げられているような専門用語を理解し，使えるようになる。
- ③科学・技術への関心を高め，現代の情報化社会の中に溢れる科学情報を適切に選別する判断力を身につけ，実生活に応用できる（情報に惑わされない）能力を養う

【行動目標】

- ①ゼミ発表に必要な一連の技術を習得する
- ②必要な文献を検索し，内容を要約できる
- ③北海道の人間と環境の関わりについて問題点を発見し，説明することができる
- ④北海道の自然・人文・社会科学について自律的に調べ，発表することができる

<グループ C>

【科目名】一般教育演習（フィールド型）「サステナブル道東」

【一般目標】道東地域の維持・継承ために特徴的な下記3つについて調査・理解する。

- ①環境問題，②観光産業，③国境問題

【行動目標】学習者は，

- ①動植物の生態系について調査して，記録できる。
- ②住民視点から見た観光産業の現状問題を理解して説明できる。
- ③地域住民との触れ合いを通じて，国境問題を多角的に理解し，説明できる。

<グループ D>

【科目名】総合科目「食の歴史と科学」

【一般目標】

本科目では身近な食を通して，歴史的・科学的視点を養うことを目指す

食の科学は，本来，総合的科学であり，自然科学，社会科学，人文科学分野の融合的な授業が構成・展開されることによって以下の教育目標が，達せられるものである。

- ①食の安全と環境問題の最新動向を理解する。
- ②人口と食糧の関係について理解する。
- ③食に対する微生物の貢献を学ぶ。
- ④食の安全と環境を理解する。

【行動目標】

- ①テーマごとに提示される重要なキーワード5つを理解できる。
- ②食糧と歴史・人口問題の関係について説明できる。
- ③微生物が産出する栄養価について説明することができる。
- ④食における安全性および倫理について説明できる。
- ⑤バランスを考えた新しいメニューを提案できる。

<グループ E>

【科目名】総合科目「A Scientist in Society」

【一般目標】

- ①研究者を取り巻く倫理的問題を認識する。
- ②現在までに確立した研究倫理規範を身につける。
- ③未解決の問題に対応する能力を身につける。

【行動目標】

- ①今日の研究者を取り巻く社会との関わりにおいて生じうる各種問題を列挙できる。
- ②提示された具体的事案に接し、問題の所在を判断し、解決策を提示することができる。
- ③未解決の問題に接した際に、問題点を列挙できる。
- ④異分野の人々との学習を通し、自己の見解を述べるができる。

※【一般目標】は北大のシラバスでは「授業の目標」、【行動目標】は「到達目標」に当たります。行動目標（到達目標）は、学生がこの授業を通して身につけるべき能力を具体的に示し、成績評価の基準になります。



写真4 岡部成玄教授の講演

写真5 「北大方式」グループ討論

写真6 討論成果の発表

写真7 修了証の授与式

生涯学習 LIFELONG LEARNING

スポーツトレーニングセンター利用者大幅増

スポーツトレーニングセンターでは、昨年度より機器の整理を行い、スペースが有効に活用されるように整備を行っています。

整備の効果から、昨年の積雪期より利用者が前年比で増加し始め、昨年度は年間で延べ2万4千人を超える利用者がいました。年間利用者が延べ2万人以上になったのは1988年以来22年ぶりのことです。今年度に入ってから利用者の伸びは衰えず、9月末までの上半期で既に延べ1万4千人を上回る利用がありました。特に、部活動やサークル活動での利用者が増加しており、前年比200%を超えています。個人利用学生については横ばいですが、教職員の利用も前年比200%を超えています(図1)。

これから冬期・積雪期を迎え、利用者はさらに増加すると予想されます。スポーツトレーニングセンターでは、利用者の要望にあわせて既存の機器修理

や新規の機器導入を進めていく予定です。

これからもスポーツトレーニングセンターの積極的な利用をよろしくお願いします。(瀧澤 一騎)

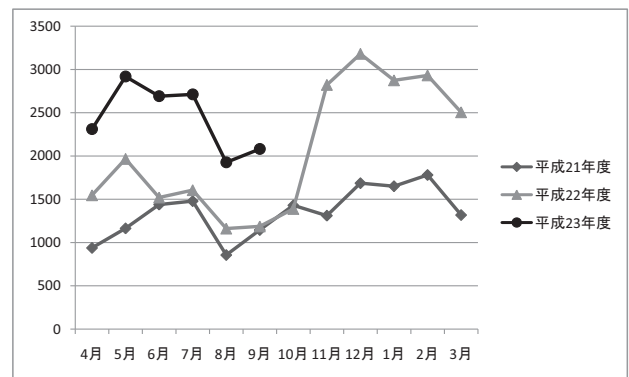


図1 過去3年における月毎のスポーツトレーニングセンター利用者数(延べ人数)

小栗有子客員准教授を迎え 「生涯学習計画研究フォーラム」を開催

今年4月に当研究部門の客員准教授に着任した小栗有子・鹿児島大学生涯学習教育研究センター准教授(環境教育学・社会教育学)を迎え、9月29日に今年度第1回目の「生涯学習計画研究フォーラム」を開きました。

現在、本学を含む全国27の国立大学に生涯学習センター等が設置されて、各地で地域と連携しながら住民の生涯学習に参画する活動を行っています。

小栗客員准教授には、「鹿児島大学生涯学習教育研究センターの取り組み」と題して、総合大学である鹿児島大学の取り組みについて報告していただきました。2003年のセンター設立後、鹿児島大学で進められてきた公開講座や「地域再生人材育成」プ

ロジェクトなどの活動成果と、その中で見えてきた課題をお話いただきました。

「ニーズは無限」である一方で、資源は限られており相当な工夫が必要であること、地域社会との連携を図るにあたっては「大学の論理」と「地域の論理」との間で相互理解を進める必要があり、個別の課題ごとにきめ細かな対応が必要であることなどが指摘されました。

大学の地域連携や生涯学習参画、総合大学における部局間の連携・協力の在り方についても示唆に富む報告をいただき、今後の当研究部門の活動を考えるうえで貴重な手がかりを得る機会となりました。

(三上 直之)

「Career Guide Book ～大学生のための キャリアデザインノート～」を刊行

キャリア教育支援室では、北海道大学の学生に対するキャリア開発支援の取り組みの一環として、『Career Guide Book ～大学生のためのキャリアデザインノート』を刊行しました。

この冊子は、学生が4年間ないしは6年間の大学生活を通して、自ら主体的にキャリアを見据え、自分自身のキャリアをデザインし、目標を定めて充実した学生生活を送ってほしいとの思いで作成したものです。

このキャリアガイドブックは、①キャリアと社会、②大学生活、③ My Career Design の3部構成となっています。

①キャリアと社会では、社会や職業についてどのように考えたらよいのか、また、それらを考えるうえで、さまざまなヒントや気づきのきっかけになるように、実際に企業に対して調査した素データや社会人の生の声を盛り込んでいます。

次いで、②大学生活では、高校までの勉強と大学での学びの違いを自ら気づき、北大内にある多様なリソースを知り、積極的な利用を通して、大学での学びの奥深さや興味深さに触れることができるように工夫しました。自分の強みや興味・関心を意識し、

これからの目標を探す手掛かりとなります。

最後の③ My Career Design では、入学後早い段階から目標のある大学生活を送るために、なるべくたくさん書きとめる、自己理解ツールやワークシートを盛り込みました。自己理解を深めること、自分の可能性を見据えること、そして、充実した大学生を送るための年次計画などが大きな特徴です。

本冊子のもう一つの大きな特徴は、北大にある多様な人的・物的リソースを大いに紹介した点と、日々の大学生活の中で、自分自身を振り返る事ができるように、各章ごとにツールを提供していることです。

この冊子は主に2011年度に入学した学生全員に配布しています。

キャリア教育支援室で初めての試みですが、北海道大学の学生がいち早い段階から、将来を展望できるように手助けになれば幸いです。(宋 美蘭)

本書についてのご意見・お問い合わせは、
キャリア教育支援室(宋 美蘭・岡田 敬志)
(内) 5147 へ
Email:smiran@high.hokudai.ac.jp

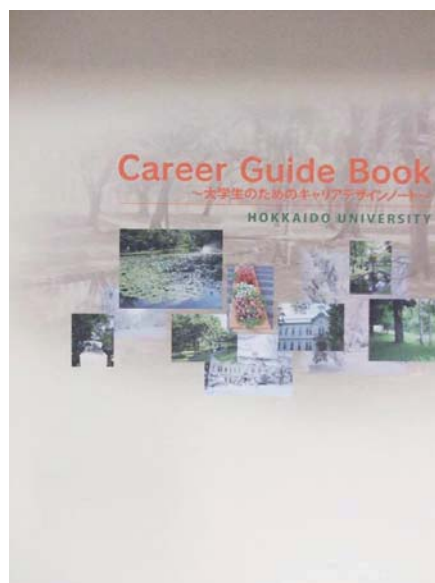


写真1 キャリアガイドブック

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

北大セミナー in 北見

去る10月8日(土)の午後、北海道北見北斗高校において北大セミナーが開催されました。まず全体講演で山口佳三理事・副学長が本学の魅力について語り、池田が総合入試について説明をした後、高校生たちはそれぞれ興味ある授業に分かれました。

開講した授業は以下の6つで、二回行われました。聴講した高校生は実数で210名、2回の授業で延べ384名でした。会場となった北見北斗高校だけでなく、北見柏陽高校や網走南ヶ丘高校、遠くは斜里郡の清里高校からも参加いただきました。熱心に授業に聞き入る高校生たちに、講師の先生方も話に熱が入りました。

綿密な準備をしていただいた北見北斗高校の先生方、生徒さんたちに積極的に参加を呼びかけていただいた網走管内の高校の先生方、そして講師の先生方にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

(池田 文人)

GIS を利用した地理学の災害・防災研究

(橋本雄一・文学研究科教授)

巨大地震による大津波とその防災

(谷岡勇市郎・理学研究院教授)

災害看護について学ぼう!

(平野美千代・保健科学研究院講師)

InfoBallon とがれき工学

(小野里雅彦・情報科学研究科教授)

地震や噴火は地球のくしゃみ

(藤井義明・工学研究院教授)

我が国の食料に関するリスクと日本農業

(柳村俊介・農学研究院教授)



写真1 高校生に災害看護について語る平野先生

科学技術コミュニケーション CoSTEP

「討論型世論調査」の社会実験を実施

CoSTEP では、この秋、学内外の研究者でつくる実行委員会とともに、札幌市や北海道新聞社、北海道新聞情報研究所の協力も得て、食の安全・安心(とくにBSE(牛海綿状脳症)問題)をテーマにした「討論型世論調査」(Deliberative Polling)を実施しました。討論型世論調査とは、無作為抽出した市民を対象に、質問紙調査とグループ討論を組み合わせた

意識調査を行い、熟慮に基づく世論形成の可能性を探る、新しい世論調査・市民参加の手法です。

科学技術の専門家と市民との対話、科学技術への信頼の確保が喫緊の課題となるなか、当研究部門では昨年春から、この討論型世論調査の手法を、科学技術コミュニケーションの新機軸とする可能性を探る研究に取り組んでいます(科学研究費による研

究)。この秋に実施した BSE 問題に関する討論型世論調査は、この研究のための社会実験として行ったものです。

9月上旬、札幌市内の20歳以上の人、3000人に「BSE 全頭検査は必要だと思うか」などについて聞くアンケート調査を実施しました。それに回答し、討論への参加に同意してくださった方の中から、抽選で150人に、11月5日(土)に北海道大学で開催する討論イベント「みんなで話そう、食の安全・安心」に参加していただきました。そして、150人の参加者には、討論を終えた後でもう一度、最初と同じアンケートに答えていただきました。

このようにして、「世論調査の対象となっているテーマについて人々が十分な情報提供を受け、じっくりと意見交換しあったら、どのような判断を下すか」を調査するのが、討論型世論調査です。「雰囲気的な世論」ではなく「熟議にもとづく世論」を探

り出し、それを政策立案に活用することを狙ったものです。

米国スタンフォード大学の研究者が1988年に開発した方法で、これまで世界17カ国で実施され、日本でも道州制や年金問題などをテーマに4回実施されました。しかし、科学技術が深く関わるテーマに関して本格的に実施するのは、世界でもほとんど例がありません。今回の研究は、スタンフォード大学のチームとも議論を重ね、世界で初めて、討論型世論調査を科学技術への市民参加の方法として活用することを試みたものです。

調査結果は、この討論型世論調査の有効性も含めて、関連分野の学会や学術雑誌で発表するほか、北海道や札幌市などにも情報提供する予定です。

詳しくは、以下のウェブサイトをご覧ください。

<http://forum.hucc.hokudai.ac.jp/dp/>

(杉山 滋郎)

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

2011 年度第 1 学期アカデミック・サポートセンターの活動

アカデミック・サポートセンターの第1学期(4～9月)の活動は表1・2のとおりです。スタッフと院生チューターによる個別の学習支援である学習サポートは、延べ1,168人が利用しました。利用者数は前年同時期の4倍へと大幅に増加しています。

今年度から開始したスタッフによる進路相談は、延べ311人が利用し、こちらも予想を上回るペースです。また、スタディスキルを紹介するセミナーには延べ70人が参加し、第2学期にもレポートの書き方に関する内容で実施します。(岡墻 裕剛)

表1 学習サポートの利用状況

	利用人数		利用時間 (h)	1年生				2年生 以上	学年 不明
	H23年度	(H22年度)		総合入試		総合入試以外			
				文系	理系	文系	理系		
計	1168	(280)	655.4	8	591	44	234	100	191

表2 進路相談の利用状況

	相談人数	相談時間 (h)	総合入試		学部別	その他・不明
			文系	理系		
計	311	136.8	12	187	78	34

日誌 EVENTS, July-September

7月

- (6月30日)～7月28日
 (行事) 北海道大学公開講座 (計8回)
 2日(会合) 大学院における大学教員養成プログラムのあり方に関する研究会 (東北大東京分室)
 3日(行事) 第1回キャンパスツアー
 7日(会議) 第2回総合教育移行専門委員会
 9日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2011(東京)
 13日(会議) 平成23年度第1回予算・施設・安全管理委員会
 13日(会議) 平成23年度第1回IRシステム開発委員会 (TV)
 14日 平成24年度入学者選抜要項公表
 16日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2011(名古屋)
 20日(説明会) 北海道帯広柏葉高校主催進学相談会
 20日(説明会) 北海道大学入試説明会(高校教諭対象)
 24日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2011(大阪)
 25日(会議) 第1回全学教育専門委員会
 27日(会議) 総合教育教務専門委員会
 27～8月2日(ワークショップ) 大学院生のための大学教員養成(PFF)講座
 28日(会議) 第4回教育改革室会議
 30日(行事) 北大プレオープンキャンパス 2011
 31日(説明会) 全国国公立・有名私大相談会 2011(横浜)
 31～8月2日
 (行事) オープンキャンパス(札幌キャンパス)

8月

- 1日(来訪) 神戸大学大学教育推進機構
 1～2日(行事) オープンキャンパス(函館キャンパス)
 5日(会議) 平成23年度第1回運営委員会
 5日(会議) 平成23年度第1回学務委員会
 18～19日(会合) IDE大学協会北海道セミナー
 23日(会合) 第2回(2011年度)IRワークショップ(同志社大学)
 26日(説明会) 大学・短期大学進学相談会(札幌)
 28日(行事) 北大セミナー in 函館
 29日(会議) 全学教育科目責任者会議(全体会)
 31日(会議) 総合教育教務専門委員会(持ち回り)

9月

- 1日(会議) 第63回教務委員会
 1～2日(会合) 東北・北海道地区大学等・共通教育研究会(秋田大学)
 7日(会議) 第2回IRシステム構築部会(TV)
 12日(会議) 第2回全学教育専門委員会
 12日(会議) 第3回総合教育移行専門委員会
 13日(会議) 第1回総合教育学生専門委員会
 13日(会合) FDネットワーク代表者会議(京都大学)
 14日(会議) 第2回学務委員会
 20日(会議) 平成23年度第1回IRシステムコンソーシアム設置準備委員会(TV)
 22日(会議) 第2回クラス担任連絡会
 26～27日(行事) 学部・学科等移行ガイダンス及び学部・学科等紹介
 30日(会議) 総合教育教務専門委員会(持ち回り)

行事予定 SCHEDULE, October-December

- | | 【日(曜日)】 | 【行事】 |
|-----|---------------|------------------------|
| 10月 | 6(木) | 抽選科目の結果発表日及び追加申込日 |
| | 7(金)～13(木) | 平成18～23年度入学者履修届 Web 入力 |
| | 7(金), 11(火) | 平成17年度以前入学者履修届受付 |
| 11月 | 20(日) | AO入試・帰国子女入試 |
| 12月 | 7(水)～9(金) | 履修登録した科目の取消し受付 |
| | 27(火)～1月4日(水) | 冬季休業日 |

ニュースレター 2011, No.88 目次

<p><巻頭言>全学教育部の使命と課題 和田 博美..... 1</p> <p>科目責任者・クラス担任からひとこと 辻 康夫..... 4 知北 和久..... 4 下田 智子..... 5</p> <p>学務委員会等報告..... 6</p> <p>総合入試導入に伴う初年次の学習状況の変化 ～導入科目の履修者数増加と GPA の上昇～ 8</p> <p>Greetings from a new visiting professor 9</p> <p>第3回「大学院生のための大学教員養成 (PFF) 講座：ティーチングとライティングの 基礎」に高い評価と期待 10</p> <p>第2回次世代教育ワークショップを開催（参 加者募集）..... 13</p>	<p>パソコンに採点させてみませんか？ ～クリッカー & ELMS 利用のすすめ～... 14</p> <p>総合教育の充実を目指して ～第18回 北大教育ワークショップ～.... 15</p> <p>スポーツトレーニングセンター利用者大幅増 19</p> <p>小栗有子客員准教授を迎え「生涯学習計画研 究フォーラム」を開催 19</p> <p>「Career Guide Book ～大学生のためのキャ リアデザインノート～」を刊行 20</p> <p>北大セミナー in 北見..... 21</p> <p>「討論型世論調査」の社会実験を実施中 .. 21</p> <p>2011年度第1学期アカデミック・サポート センターの活動 22</p> <p>日誌・行事予定 23</p> <p>目次・編集後記 24</p>
---	---

編集後記

昨年インディアナ大学を訪問して大変驚きました。北米の大学でも、大学院教育における教育目的は、つい最近まで「研究者の養成」でした。ところが、今や文系理系を問わず、「教育能力の習得」が付加されるようになってきているのです。本号で紹介されている PFF 教育は、そのために企画された学習機会です。

ここ5年ぐらいの内に全米で PFF 教育を導入した大学は70を越え、研究大学の半分がすでに導入しています（フォン・ヘーネ先生の私信）。この動きは、大学内部からの変革ではなく、企業や役所など博士号取得者が就職した組織からの要望を実現したものです。

当初 PFF は将来教員になる人のために始められましたが、大学院生全員が習得すべき科目に変わりつつあります。より良い就職のためです。日本の大学院がこの変革を意識し、早めに PFF 教育を導入することを期待いたします。（歳）

ニュースレター (旧「センターニュース」)

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)

通算 第88号

発行日： 2011年10月1日
 発行元： 北海道大学高等教育推進機構
 (旧高等教育機能開発総合センター)
 〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
 電話 (011)706-7520・FAX(011)706-7854
 編集委員： 西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅
 木村純・亀野淳・三上直之・瀧澤一騎
 山岸みどり・鈴木誠・池田文人
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
 電話：(011)706-7514;FAX(011)706-7521
 インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>